

2 小学部高学年「社会性の学習」の指導事例

小学部4年 「社会性の学習指導案」

1 題材名「パズルゲーム」

2 学級の実態と題材設定の理由

本学級は、自閉症又は自閉的傾向のある児童で構成される自閉症学級である。要求はサインや単語で伝える児童が2名、2語文～3語文で伝える児童が2名、日常の会話が成立する児童が1名である（アニメの一部を言語化していることも多い）。5名とも、全員クラスの友達の名前を覚え、遊びの場面では、友達の遊びに興味を持ち、まだ教師が仲立ちになることが多いが、玩具を借りる時に、友達に自分から「貸して」を伝えることができるようになり、少しずつではあるが、友達に対しての関心を持った行動が見られるようになってきた。物を媒介としながらも順番を待つことや友達とやり取り言葉を通して、他者との関わりの基礎を養うことにつながればと考え、この題材を設定した。

<活動グループについて>

友達への興味・関心が出てきた5名ではあるが、対人面では、①S-M社会性発達検査の結果からも集団参加の領域で1歳10か月から5歳5か月までと差があり、認識面では、②新版K式発達検査2001で、認知・適応で1歳10か月から5歳10か月までと差がある。③自閉症教育の7つのキーポイントからも平均が2.8から3.8までと差が出ている。そこで、児童を適応に応じて2つのグループに分けた。

グループ1は、自分から要求言葉が出てきているが、まだ表出が弱く、興味があること以外への注視する力が弱い。また、課題への集中力を維持することが難しいので、少人数でゆっくり順番の理解をしたり、大人との1対1の関係の中で、やり取り言葉の表出をしたりすることをねらいとする。

グループ2は、少しずつではあるが、友達の活動に注視しながら待つことができ、友達同士の中で、自発的に場面に応じたやり取り言葉が出始めているので、順番を意識する中で、友達とのやり取り言葉の表出をねらいとしている。

<教材について>

新版K式発達検査2001の結果から、どの児童も④「積木」や⑤「形の弁別」など、操作性があり、色や形を見分けながら取り組む課題において比較的高い数値が出ている。そのため、得意な操作的な活動を取り入れ、好きなキャラクターのパズルゲームをすることにした。グループ1は、終わりがより分かりやすい、型はめ（3つ）を完成させる。また、型はめのピースの入った「?ボックス」を回すことで順番への意識を促した。グループ2は、友達と一緒に3つのパズルを完成させる。また、ゲームを行う上で必要なサイコロが回ってくることから順番の理解を促すようにした。サイコロを振り、出た目の数だけ、パズルのピースを「?ボックス」から取り出して、パズルを完成させていく。サイコロの目は、1、2、残念マークの3種類で（残念マークが出るとパズルが取れない）、1回のゲームの中で、2回は順番が回ってくるように設定した。

グループ1は、教師に「?ボックス」をもらう時に「ありがとう」と伝え、グループ2は、サイコロを友達に渡す時に、「どうぞ」、受け取る時は「ありがとう」と伝える。

この後は、グループ2について記述する。

解説

<児童の実態（行動観察等）と題材のねらいについて>

遊びの場面で、5名とも（実態差はあるものの）音声による発語があり、「貸して」と話せるようになってきているが、友達が貸す意思がないのに、横から玩具を奪ってしまう児童や、「貸して」と教師に向かって伝える児童、「貸して」と伝えられて「どうぞ」とすぐに渡せる児童から逃げるように立ち去る児童と、観察していくと、やり取りの実態が様々であることが分かりました。集団での活動の題材を選定するに当たり、児童の興味・関心があり、意欲につながる物を媒介にしながら、順番を意識し、教師や友達との正しいやり取りを通し、他者との関わりの基礎を養うことにつながる題材を考えました。

<活動グループについて>

「パズルゲーム」を始めたときは、児童5名で取り組んでいましたが、アセスメントの結果からも明らかなように、ルール理解や、やり取りの部分で実態に差があり、5名が集中して課題に取り組むことが難しいことが分かりました。そこで、教師と一対一でのやり取りを重視するグループ1（児童2名）と、教師を媒介として、友達とのやり取りをねらいとするグループ2（児童3名）と、ねらいを2つに分けたグループにすることにより、個への配慮（スケジュールなど）の工夫がしやすくなり、グループ2では、より友達を意識できる場面を多く作ることができました。

<教材について>

5名とも、操作性のある課題が得意なため、ゲームの中に、児童の好きなキャラクターの付いたパズル、型はめを取り入れました。グループ1は、初めと終わりがより分かりやすい型はめを使用しました。

<用語説明>

① S-M社会性発達検査

適応範囲は、乳幼児～中学生。社会生活能力の測定を通し、子供の社会生活に必要な基本的な生活能力の発達を明らかにすることを目的としています。知的能力とは独立した社会的適応能力を測定します。6つの領域のプロフィールから指導の手掛かりとなる全人格的な発達像を得ることができます。生活年齢、発達年齢の結果のみで判断せず、プロフィール全体から発達の伸びと偏りを読み取ります。

② 新版K式発達検査 2001

新版K式発達検査 2001では、乳幼児期から12、3歳頃までの精神発達の状態を調べるための検査です。1) 姿勢運動、2) 認知適応、3) 言語社会の3領域に大別され、各領域と全領域について、発達が到達している発達年齢段階を測定します。

③ 自閉症教育の7つのキーポイント

20名強の専門家（特別支援教育関係の研究者、教師）が、自閉症の児童が学ぶための基礎及び中核であるポイントをまとめ、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が発表したもの。「学習態勢、指示理解、セルフマネジメント、強化システムの理解、表出性のコミュニケーション、模倣、注視物の選択」の7つのキーポイントについて、それぞれどの段階にあるのかを行動観察等で知り、課題を設定していきます。

*「自閉症教育実践マスターブック キーポイントが未来をひらく」（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 平成20年2月）

④ 「積木」

新版K式発達検査 2001の認知適応の領域の一つです。検査者の指示の理解と模倣を調べるとともに、腕と手掌の機能を調べます。位置関係の理解から空間関係の理解、さらに、位置関係を短時間保持して再生する能力へと進むことができます。

⑤ 「形の弁別」

新版K式発達検査 2001の認知適応の領域の一つである。形を認知して、いろいろな形を弁別し、同じ形の図形を同定する作業を通して、注意の集中と、同定の方法及び、図形の複雑さによる同定方法の違いを調べます。